

第1回 兵庫型「体験教育」の評価・検証委員会 次第

日 時：平成22年6月25日(金)14:30～

場 所：兵庫県民会館 「鶴」

- 1 委員長の選任等について
- 2 兵庫型「体験教育」の現状と課題
- 3 兵庫型「体験教育」の改善充実方策について
- 4 事務連絡

## 第1回兵庫型「体験教育」の評価・検証委員会 議事要旨

平成22年6月25日(金)14:30~16:30

県民会館7階「鶴」

### 1 開会

### 2 開会挨拶

開会后、大西教育長が挨拶を行い、出席者に委員就任の委嘱と本委員会における兵庫型「体験教育」の評価・検証についての審議を依頼した。

### 3 委員紹介

### 4 委員長・副委員長選出

委員の互選により、梶田環太平洋大学長を委員長に選出。梶田委員長が、横山関西学院大学教授を副委員長に指名。

梶田委員長から、委員長就任に当たり、挨拶があった。

兵庫県において体験活動の始まった経緯及びその目的について。

県事業の6つの体験活動を通して、体系的に兵庫県の子どもの体験の幅を広げ、子どもたちに多様な発達場を保障している。

この会議で兵庫の取組の良さをもう一度浮き彫りにして、兵庫県だけでなく全国に改めて発信して、教育的効果を述べていくことが大切である。

### 5 資料説明

協議に先立ち、兵庫型「体験教育」の現状と課題について、事務局から説明が行われた。

### 6 協議

#### 委員長

平成15年に学習指導要領の「基準性」が明確になり、学校や地域の実情に応じて内容がプラスできるようになった。時間数も必要であればプラスできるようになっている。地域や学校の自主的な判断が重要となる中、これからの兵庫型「体験教育」のあり方が議論されるのではないかと。

全国学力・学習状況調査の結果については、兵庫県の中でも地域的なばらつきがあると思うが、もし必要であれば事務局で資料を準備してもらい考えてみてはどうか。

#### 委員

確かに、全国学力・学習状況調査では地域によって差がありそうな項目がある。基本的な条件が違っている場合に、それぞれの地域の特性に応じた形で分析を行う必要があるのではないかと。

#### 委員

トライやる・ウィークにおいて、トライやる・ウィークを経験した大学生がトライやる・ウィークのリーダーとなったり、ボランティアとして協力したりすることはないのか。

## 事務局

自然学校ではよくあるが、トライやる・ウィークは殆どが事業所でお世話になっているため、若干動作に補助が必要な特別支援学校や特別支援学級の生徒の補助として、ボランティアが入るケースはあるが、活動自体に大学生等のボランティアが入ることはあまり無い。

## 委員長

まだ伺いたいところはあるが、質問はこれからの話し合いの中で出していきたい。

## 事務局

3つの論点を設定

- (1) 兵庫型「体験教育」を行う意義や目標はどのようなものか
  - (2) 兵庫型「体験教育」の内容をどのように改善・充実していくか
  - (3) 兵庫型「体験教育」の実施体制をどのように改善・充実していくべきか
- 意義や目標について検証する中で、子どもたちにどのような資質や能力を育てていくのか小学校から高等学校までの各発達段階に応じて、しっかりと整理することはできないだろうかという点を論点として加えさせていただいている。
- (1) 「トライやる・ウィーク」による生徒の成長への効果（過去の検証より）
  - (2) 自然体験学習の教育的効果において特に変容が大きいとされた項目（過去の検証より）
  - (3) 「行動の記録」として例示されている項目（10項目）
  - (4) 「社会人基礎力」3つの能力（12の要素）
  - (5) 「体験の力（体験を通して得られる資質・能力）」

## 委員長

体験教育の意義や目標を考えながら、これからどうしたらいいか、どのような実施体制をとればいいのかという点をからめながら、ご意見をお願いしたい。

## 委員

自然学校の20年目の検証に加わったが、兵庫県の取組がもっと全国に広がってほしいと思う。文部科学省が平成13年にまとめた「体験活動事例集」は、兵庫県の取組をモデルとしていた。また、今回の学習指導要領の改訂において「言語」と「体験」は二つのキーワードとしてとらえられ、学習指導要領解説で取り扱っているモデルも兵庫県であった。ただ、全国的にみると、体験活動への取組はまだ積極的なものとは言えない。

社会的には体験活動と学力形成を反比例的にとらえている動きがまだまだある。兵庫県の取組が、学ぶ意欲や学力とどのようなかわりがあるのかを示していくことが必要であり、体験活動が社会的な支持を得ていく大きな方向性となるのではないか。

今までは、自然学校を特別活動・学校行事として取り組むことが多かったが、今後は、総合的な学習の時間と関連づけて、「学習」という部分をクローズアップする必要があると思う。6つの事業に示されているような活動に加えて、教科学習における体験的な学習を充実させ、両者を効果的に関連づけていくことが大切である。

## 委員

地域を活動の場とする体験活動では、学校側が考えている生徒に与える成果と、受入側が考えている生

徒に与える成果が全く異なっている。体験活動を考えるときに、社会は体験活動をどのように評価しているかという視点で考えてはどうか。

#### 委員

受け入れ側としては、須磨区の少年Aの事件以降、中学2年生は怖いというイメージがあった。しかしトライやるで接してみると実際は素直だということが分かった。また、子どもが社会の中で活動する姿はとても立派で、子どもに対する期待が高くなった。

逆に、子どもたちも家でだらしない親しか見ていないし、学校では怒られてばかりなので、大人というものをなめている。しかし、社会には入ってみると大人たちが偉いということが分かる。社会での子育てという面からいうと、とてもインパクトがある。

後付けの組織ではなく、元々ある組織に子どもたちを入れただけでこんなにも効果が上がる。本当に仕事をさせるので、成果が出ると達成感を得られる。仕事は人を育てる。子どもたちが自信を持つようになる。今回の会議の資料に書いてある生徒たちに学ばせたい資質・能力は、実際の会社でも学ばせたい内容と変わらない。大人・子どもの区別なく、獲得してもらいたい資質・能力である。

ただ、自然体験では学ばせたいものは違ってくる。今の子どもたちに足りないことは「見えないものに対する尊敬」である。自然には人間が作ることができないすばらしさがたくさんあり、グループ活動も大切だとは思いますが、「自然への敬意・畏怖・畏敬の念」ということを一番に教えてほしい。

#### 委員

学校の立場で言うと、今のご発言はとてもありがたい。生徒たちは、人の温かさに感動し、責任を持ったことにより達成感や充実感を獲得して学校に戻ってくる。福祉施設に行った生徒はお年寄りの言葉に感動して学校に戻ってくる。それらの体験が教科学習への意欲とかコミュニケーション能力や思いやりなどの力とつながってくる。子どもたちは「トライやる・ウィーク」に対してとても期待しているので、決してマンネリ化は許されない。子どもたちが新鮮な期待を持っていることを心して、現場も携わっていきたい。

#### 委員

昨年度から小学校3年生での環境体験事業が全校実施となったが、学校の中では1年生から一人一鉢運動として、朝顔やチューリップ、学年が上がるとニンジンやトマトなどを自分の鉢の中や学習園で育てている。プール掃除の前にはヤゴ救出作戦を行ったりしている。いろいろな自然体験の積み重ねがあって、3年生の環境体験事業につながっている。今までは学校の中だけの活動だったものが、地域を広げて継続的な体験をしていくことにつながっている。

5年生の自然学校では更に遠い場所でいろいろな自然にふれることができる。初期のころはあれもこれもとプログラムに追われていた上に、教師の側も準備をしすぎていた感じがあった。最近では、星空をゆっくり見るといったように、プログラムも精選されてきている。マンネリ化の話もあったが、子どもたちは毎年違うので、同じ学校でも子どもに見合ったプログラムを行うようにしている。

系統性ということを考えると、今までトライやる・ウィークとのつながりは考えたことがなかったので、そのあたりを整理しながら考えていきたい。

#### 委員

小学校の自然学校や中学校のトライやる・ウィークなど、様々な経験をした生徒が高校に入ってくる。本校のトライやる・ワークでは、ローカルパートナーシップとグローバルフレンドシップとして、地域で活躍する部分と、広く異文化体験をする部分とで構成している。さらに、防災をキーに平成21年度

では延べ2600件ほどのボランティア活動に参加している。

ボランティア活動は子どもたちの実践のように見えるが、地域の方でそれを受け入れていただける素地があって初めてボランティア活動に参加できていると言える。昨夏の佐用町の水害の被災地支援もボランティアで参加したが、高校生が期待以上の働きをしたことで、マイナスのイメージのある高校生に対してプラスのイメージを持ってもらい、消防団の方から「高校生がこんなに働くとは思っていなかった」ということばをいただいた。このようにほめていただくことで、生徒自身の自信や自尊感情も高まっている。

高校生のインターンシップは専門学科の高校で積極的に行われている。それとともに普通科高校や総合学科等においてもインターンシップが実施されているが、具体的な生徒の感想を紹介したい。インターンシップでうまくいったという感想はたくさんある中で、幼稚園でインターンシップを行ったがうまくいかず、3日間毎日帰りたくて仕方がなかったという感想を持った生徒がいた。しかし、学校に帰ってきた後、悲しいという感想を持ったことを振り返ったときに、悲しいと思えたことはもっと自分がかんばれと後押ししてくれた体験だと感じたと言っている。うまくいったことだけでなく、失敗したという経験もその生徒にとってプラスになることがある。

1年生全員がインターンシップを経験している高校もある。受入企業の開拓が非常に大変である。しかし、看護実習に行った生徒が、「看護とは科学であり、芸術である」という言葉を現場で学び、看護の道にすすむことを決心したということをお話している。

子ども達は学校の教師が設計する以上のことを学んで帰ってきてくれるということを実感している。

## 委員

活動には「完結型」と「きっかけ型」があると思うが、今までのお話を聞いていて、兵庫県の体験活動は「きっかけ型」になるのではないかと感じた。「きっかけ型」では、体験をきっかけに子どもの学力や活動がどう広がるか、子どもたちにどのような力をつけていくかということが大切になる。例えば、小学生の場合は、学びのスタイルとして、机上のことだけではなく、実際のものに触れる「実物体験」が大切になる。自然体験や環境体験が重要になる。そして、その体験をどのように日常の学校生活に活かすかということ、そのつながりを教師側がきちんと意識しておくことが大切である。もちろん、あまりに窮屈に考える必要はなく、体験することそのものの楽しさが大切であることは言うまでもないことである。

「総合的な学習の時間」は大切な活動だ。そこで触ったり観察したりして養ったことがどう教科に結びつくのか。中学生は社会とのつながり、高校生は仕事とのつながりを軸に、いかに視野を広げるかということ、学校生活の中ではイメージすらできないような事柄について、具体的に考える機会を持たせるという大切な働きがある。

また、今回扱われている体験活動と、他の活動とをいかに有機的に関連させるかということも大切だ。例えば、放課後に行われている学校支援地域本部など様々な活動がどうサポートしているかなど、もう少し広がりを持った位置づけや、今回の6つの事業とどのように関連しているかということに配慮すべきだ。6つの事業を体験した子どもたちが、「もっと体験したい」、「また取り組みたい」という気持ちを持ったときに、それに応える場を提供できるようにしていくことが必要なのではないか。

## 委員

自分の子どもが「トライやる・ウィーク」実施の第1期生であったことから、創設期から携わってきた。思い出すと、創設期の準備は学校も地域も大変であったが、5日間の活動により、中学生の生活や考えていることが地域としてよくわかるようになるという効果は大きかった。今、私の居住地である東灘区では、「多子高齢化」がすすんでいるが、そのような中で「トライやる・ウィーク」の実施は、地域に

活気と元気が出て、地域としては非常に効果的な活動であると感じている。

「マンネリ化」の話がでたが、今でも受入先確保や準備のための苦労は相変わらずある。また、巡り合わせによってはトラブルが発生することもある。しかし、今、改めて「トライやる・ウィーク」の意義の大きさを実感している。ただ、中には、その意義深さを理解していない場合も見受けられる。塾を休まなければならないから難色を示す等の無理解な保護者もあり、残念なことである。親の意識をもっと高めるために、十分な説明が必要である。

委員長

立場が違えば視点が異なり、貴重なご意見をいただける。

委員

3人の子どもの親として関わってきたが、生き物の好きな長男は、八チ高原での自然学校は本当に楽しい思い出になったようだ。普段登校する様子とは明らかに異なっていた。

また、「トライやる・ウィーク」については、地域住民としても発見があった。普段は足を伸ばさない受入先に、子は友達が行っているところとして、親は子どもがお世話になっているところとして訪問する機会が増え、親の方も地域に関わる機会が増えた。

委員長

私は幼・小・中・高等学校の5人の孫の「おじいちゃん」であるが、居住地である大阪府でも、今、体験教育を取り入れた活動がなされるようになってきている。

具体的な話を聞く中で、最近の子どもたちに大きな課題があると感じる。例えば、小学生は、虫が怖いと言う。また、きれいな花が咲いていてもそれを意識することがない。近くの小学校に様子を見に行くことがあるが、子どもの変化に驚かされることが多い。体験の場を設定するだけではなく、「いざない」ということが大切だ。今まで以上に、子どもたちに関心を持たせる、おもしろさを伝えるという「いざない」を意識する必要があるだろう。

中学生や高校生に対しても、今まで以上に事前・事後指導が重要になってきたことを感じる。例えば、最近の中学校や高校の女子生徒でも、小さな子どもとの接触を嫌う生徒がいる。事前指導として、子どもとのふれあいのおもしろさなどを伝えておくこともあってよいのではないかと。また、単に、思い出に残るという意味だけでなく、子どもたち同士で振り返って話し合いをするというような事後指導も大切である。教育の研究者としてではなく、「おじいちゃん」としての率直な思いだ。

委員

資料9に兵庫型「体験教育」の独自性とあるが、今の時点で基盤となる理念というべきものがあるのか？

事務局

理念としては、教育基本法等に基づく本県の教育振興基本計画では、「元気ひょうごへ ころ豊かな人づくり」を基本理念として、6つの柱の1つに体験教育をあげている。まさに体験教育に力を入れているということは言える。

実施形態ということでは、体験活動の期間が他県に比べて長いことや、地域に「体験教育」を支える土壌が出来つつあるということが特色だ。

委員長

兵庫型「体験教育」の特徴として現時点で言えることは

- ( 1 ) 先駆的な取組である
  - ( 2 ) 兵庫県教育振興基本計画に位置づけられ、教育活動全体の中で体験活動を重視している
  - ( 3 ) 発達段階に応じて6つの事業( 具体的活動 ) の積み上げが出来ている
  - ( 4 ) 6つの事業がきっかけとなり、他の体験的な活動も重視している
- ということがいえるかと思う。

本日はこれまでとし、次回は、より一層の充実をはかる方向について議論することとする。

7 諸連絡

次回の日程調整等。

8 閉会